

# 指導資料

# 道徳 第32号

鹿児島県総合教育センター  
平成29年10月発行

対象  
校種

小学校 中学校 義務教育学校  
特別支援学校

## 「考え、議論する道徳」の授業構想のポイント

これからの道徳科では、「考え、議論する道徳」への質的転換を図るため、教師の指導観を基に指導の意図を明確にし、それに基づく指導方法を工夫することがポイントとなる。そこで、このポイントに基づいた授業構想の仕方について紹介する。

### 1 教科化の背景と求められる道徳科の授業

道徳の時間は、小学校は平成30年度から、中学校は平成31年度から「特別の教科 道徳」として全面実施される。今回の教科化については、歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があることや、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる場合があること、いじめの問題等現実の困難な問題に主体的に対処することができないことなど多くの課題を改善し、道徳教育の更なる充実を図るために行われたものである。

このような状況を踏まえると、道徳科の授業において、特定の価値観を児童生徒に押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育の方向の対極にあるものと言わなければならない。これからの道徳科の授業には、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育とその要としての道徳科の役割を明確にした上で、発達の段階に応じて、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題として捉え、しっかりと向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への転換が求められている。

### 2 「考え、議論する道徳」の授業構想

「考え、議論する道徳」については、図1のように捉えられている。

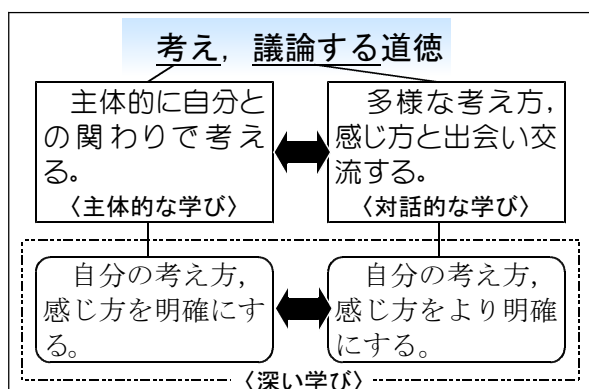


図1 「考え、議論する道徳」の捉え方

つまり、これからの道徳科では、ねらいとする道徳的価値について自分との関わりで主体的に考え、互いの価値観を交流し合うことで自分の価値観を深め、新たな見方や考え方を生み出していく授業が求められる。

#### (1) 指導観の明確化

「考え、議論する道徳」を構想するためには、教師の指導観を明確にすることが大切である。指導観とは、ねらいとする道徳的価値について明確な考えをもち（価値観）、児童生徒の実態から本時の方向性を明確にした上で（児童生徒観）、教材をどのように活用するのか（教材観）ということである。

そこで、明確な指導観に基づいてどのように授業を構想していくのか、その手順と方法について、小学校第1学年の「B 友情・信頼」（教材名「くりのみ」（『みんなのどうとく 1年 鹿児島県版』）を例に説明する（図2）。

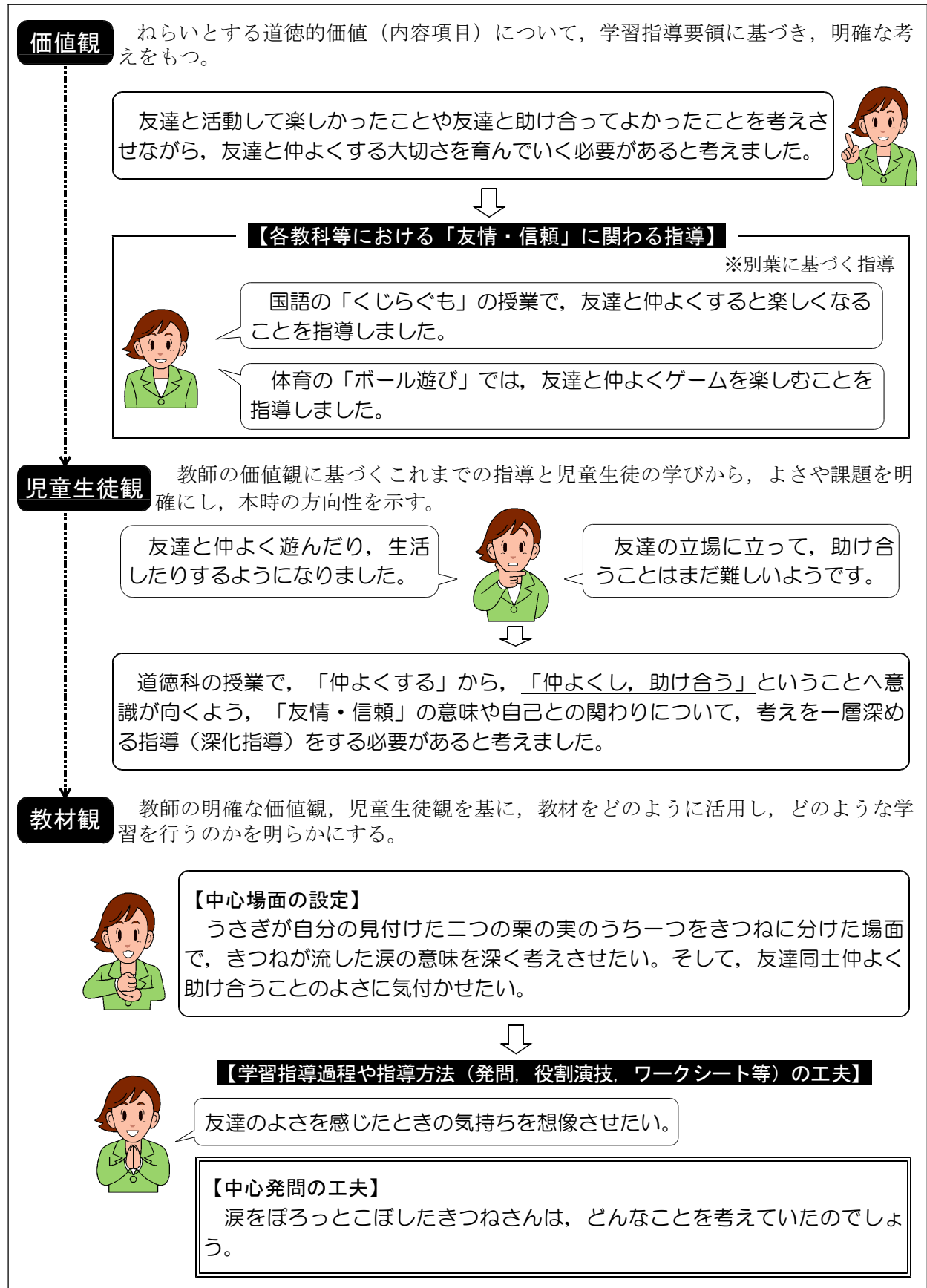


図2 明確な指導観に基づく授業構想例

(2) 指導のねらいに即した指導方法の工夫  
 道徳科の指導方法については、『小学校  
 (中学校) 学習指導要領』(「第3章 特別  
 の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と  
 内容の取扱い」の2(5))に、次のように記  
 載されている。

道徳科では、道徳的諸価値についての理解

児童(生徒)の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。その際、それらの活動を通じて学んだ内容の意義などについて考えることができるようにすること。(以下略)

※ 下線は作成者が加筆している。

を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角

的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を行う。こうした道徳科の特質を生かすことに効果があると判断した場合には、各教科等と同様に、問題解決的な学習や体験的な学習などの指導方法を適切に取り入れて授業を構想することが大切である。

また、これまで行われてきた、読み物教材の登場人物の心情に共感しながら道徳的価値の自覚を図る学習も効果的である。この学習では、登場人物の心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えさせるように工夫することが大切である(読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習)。

表1は、「考え、議論する道徳」につながる指導方法を工夫する際の視点である。そして、これらの指導方法を効果的に活用した実践事例は次頁に示す。

表1 「考え、議論する道徳」につながる指導方法を工夫する際の視点

<p>の読み物教材が中心の登場人物の学習へ</p>	<p>【工夫する視点】          教材の登場人物を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的価値の自覚を深めることができるようにする。  <b>【考え、議論するための視点】</b>          ・ 主人公は、どうしてこのような行動をとることができた(できなかった)のだろう。          ・ もし、自分だったらどのように考えるだろう。          ・ もし、自分だったら主人公のように考え、行動することができるだろうか。等</p>
<p>問題解決的な学習</p>	<p>【工夫する視点】          児童生徒の考えや根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問等を通じて、問題場面における道徳的価値の意味を考えることができるようにする。  <b>【考え、議論するための視点】</b>          ・ 何が問題になっているのだろうか。          ・ 何と何で迷っているのだろうか。          ・ 本当の友情とは何だろうか。          ・ 同じ場面に出会ったら自分ならどのように行動するのだろうか。なぜ、そのように行動するのだろうか。          ・ 他によりよい解決方法はないだろうか。等</p>
<p>道徳的行為に関する体験的な学習</p>	<p>【工夫する視点】          疑似体験的な活動(役割演技等)を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができるようにする。  <b>【考え、議論するための視点】</b>          ・ どうして声を掛けられないでいるのだろうか。          ・ どんな気持ちになるのだろうか。          ・ この場合、どうすればいいのだろうか。等</p>

[小学校第5学年]

- ◇ 主題名：相手の立場を考えて（B-11 相互理解・寛容）
- ◇ 教材名：「すれちがい」（『みんなのどうとく 5年』学研教育みらい）
- ◇ 教材の概要

【よし子の日記】

よし子は、えり子とピアノのけいこと一緒にいこうと約束したが、えり子はなかなか来なかった。いら立つ思いで待ったあげく、すっぱかされたと思ひ込み、えり子の事情を聞かず、一方的に相手を非難した。

【えり子の日記】

家の人からスーパーで買い物をする手伝いを頼まれた後、急いで行ったが、よし子の約束の時間に間に合わなかった。何度かよし子の家に電話をしたがつながらなかった。時間に遅れたことは申しわけないと思うが、あまりにも一方的に悪く言われると気分がよくない。

- ◇ ねらい  
よし子とえり子の行為について、相手の過ちを責める気持ちやその背景を考えることを通して、相手の立場や気持ちを受け入れて理解しようとする態度を養う。
- ◇ 展開（展開の部分のみ抜粋）

基本発問と児童の反応	指導上の留意点
<p>1 よし子の日記を読み、よし子の立場から問題解決する。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● ここで何が問題になっているのですか。<ul style="list-style-type: none"><li>・ えり子が約束を破ったことです。</li><li>・ よし子がえり子の言い分を聞かないことも問題です。</li></ul></li></ul> <p>2 えり子の日記を読み、様々な解決策を考えて、役割演技をする。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 二人はどうすればよかったのでしょうか。 (えり子役) ごめんね。買い物を頼まれていたの。 (よし子役) 何度も電話をしたし、ずっと待っていたのよ。 (えり子役) 私も電話をしたよ。何度か電話をしたらよかったね。 (よし子役) そうね。今度から時間を決めておこうね。</li><li>● 役割演技をしてどうでしたか。<ul style="list-style-type: none"><li>・ 相手の考えをきちんと聞いてあげていたらよかったと思いました。</li><li>・ お互いに自分の考えを言い合えてすっきりしました。</li></ul></li></ul> <p>3 身近な道徳的問題でシミュレーションをし、日常生活に生かす。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 係活動で意見が分かれたり、遊びを決めるときにもめたりしたとき、どうしたらいいと思いますか。<ul style="list-style-type: none"><li>・ けんかになるかもしれないので、前もってルールを決めておけばいいと思います。</li><li>・ 相手の意見をまずは聞いた方がよいと思います。</li></ul></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 登場人物の考えが、結果として心情や行動にどのような影響を与えるかについても考えさせる。</li><li>・ 複数の解決策を考えさせ、他人の意見は批判せず、共感的に理解させるようにする。</li><li>・ 自分なりの解決策で役割演技をさせる。</li><li>・ 役割演技をした後に、どうしてそうしたのかを聞いたり、よかったところやこうしたらいいのにとするところを考えさせたりする。</li><li>・ 教材で選択した解決方策を別の身近な問題解決にも適用できるようにする。</li></ul> <p>【評価】 取り得る行動を議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めているか。</p>

(伊佐市立菱刈小学校 山口 秀司教諭の実践を基に作成)

それぞれの指導方法はあくまでも例示であり、「型」として固定的に捉えることのないようにするとともに、それ自体が目的ではなく、ねらいに即して適切に取り入れることに留意する必要がある。

間もなく、道徳の時間が「特別の教科 道徳」としてスタートする。教科になる背景とその意義をしっかりと認識し、児童生徒のよ

りよく生きようとする道徳性を豊かに育む授業を創造していくことがますます求められる。

—引用・参考文献—

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』平成29年6月
- 文部科学省『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）』平成28年7月
- 赤堀博行著『道徳授業で大切なこと』平成26年，東洋館出版社

(教科教育研修課 橋口 俊一)